

令和3年度

【優秀作品集】

「大切な命を守る」
全国中学・高校生作文コンクール

警察庁 犯罪被害者支援室

発刊にあたって

犯罪被害者やその家族・遺族（犯罪被害者等）は、犯罪等によってその生命、身体、財産、権利・自由を侵害されるなどの直接的な被害を受けるだけでなく、周囲の人々からの心ない言動による二次的被害、職を離れざるを得なくなることによる経済的困難など、多様かつ長期間にわたる被害に苦しんでおられます。こうした方々が再び平穏な生活を取り戻すことができるようにするためには、犯罪被害者等が抱える困難や思いについて理解を深め、社会全体で犯罪被害者等を思いやり、犯罪被害者等を支える気運を醸成していくことが極めて重要です。

このような観点から、全国警察では、教育委員会や民間被害者支援団体等と連携して、これからの社会を担う中学生・高校生を対象とした犯罪被害者等による講演会である「命の大切さを学ぶ教室」の開催に積極的に取り組んでおり、受講した中学・高校生が命の大切さを学び、犯罪被害者等の心情や置かれている状況を正しく理解することで、犯罪被害者等への配慮や協力への意識の醸成に努めています。

警察庁では、この「命の大切さを学ぶ教室」の効果を一層向上させるとともに、教室の受講者だけに限らず、多くの中学・高校生が犯罪被害者等への理解を更に深め共感を生む効果を期待する施策として「大切な命を守る」全国中学・高校生作文コンクールを開催しており、今回で十一回目となります。

本コンクールの応募作品については、学ぶ教室を受講し、又は報道等により知り得たことなどを踏まえ、大切な命を守り、被害者を生ませず誰もが安全で安心して暮らせる社会を実現することに関して、自分の考えや意見等を表現した作品となっています。

本年度は、全国から一万三百四十三点もの作品の応募をいただき、その中から優秀作品を選考することができました。本冊子は、選考された作品のうち、

- ・ 国務大臣・国家公安委員会委員長賞……………二点
- ・ 文部科学大臣賞……………二点
- ・ 警察庁長官賞……………六點

を受賞した作品を取りまとめたものです。

本冊子が、犯罪被害者等が長期にわたり直面する心身の苦痛やその置かれた厳しい状況等のもとより、被害者支援の重要性等について、広く国民の皆様方に御理解いただく一助となりますことを心より願っております。

令和三年十一月

警察庁長官官房審議官（犯罪被害者等施策担当） 滝澤 依子

審査委員講評

事件や事故等の犯罪被害について、大切な命を守り、被害者を生ませず誰もが安全で安心して暮らせる社会を実現することに関して多くの作品が寄せられました。その中でも、特に優秀作品は、「命の大切さを学ぶ教室」で尊い家族の命を奪われた講師の話を聴くなどして、犯罪被害者やそのご遺族、ご家族への理解、共感が得られたり、命の大切さをよく理解した内容となりました。

中でも、講師の思いと自分の親の思いを重ね合わせて考え、改めて命の大切さを思い直すとともに、世の中に人の死を軽く感じさせるような情報が多く存在するのではとの疑問を持ち、そこからさらに講師と親の言葉を「自分の命を大切にする指針にする」というような考えで締めくくられた作品には、心うたれるものがありました。

また、尊い家族の命が一瞬にして奪われた講師の言葉を深く心に刻み、その悲しみ、苦しみに共感し、理解し、自分の経験も踏まえて実現したい社会を考え、命の大切さを理解する機会を持つことの重要さを訴えている作品には強く感銘を受けました。

さらには、身近で幼い命が奪われたことなどの親の話を真剣に捉えずにいたが、講師の話を知ったことで命を大切にすると、親の切実な思いに気付かされ、それに応える行動に変えていったというすばらしい作品もありました。

このほか、講師の壮絶な体験に涙し、悲しさがある中においてなお「命の大切さを学ぶ教室」で講演することの偉大さにも触れている内容は、その心情に配慮している点において心温まるものがありました。講演後には、日々の生活でしっかりルールを守る行動に改め、ほかの生徒も規範意識が高まったということに対して、講師のおかげであると感謝する言葉も書かれていて、最後には、すべての子どもたちに講師の話が必要不可欠だと結論づけられておりすばらしい作品となっています。

他の作品には、当たり前前に過ぎることができるといふ作品もありすばらしいことだと思えました。ご遺族が置かれている状況をご遺族の心情について話し合ったという作品もありすばらしいことだと思えました。ご遺族が置かれている状況を痛感して消えない悲しみやその苦しさを共感した内容や、被害者やご遺族、ご家族へかける言葉は悪意がなくとも精神的に苦しめることがあることを理解した作品もあり、被害者支援にとつて大切な考えです。ご遺族が事件による直接的被害以外にも様々な苦勞をしていることを調べたり、その後の様々な被害者支援活動についても学習するなど、被害者を生まない社会を考えている作品や、法律改正と社会全体の取組にも考えを及ぼせた作品もありました。講師の話を知って今までにないショックを受けたことを自ら分析し、とるべき行動を考え、命の大切さを伝え広げていくという具体的行動に自ら気づいたという作品もありました。いずれも強い思いが伝わってくるすばらしい作品でした。改めまして一万点を超える作品を応募してくださったすべての皆様にご心より感謝いたします。この優秀作品集が、犯罪被害者支援に対する国民の皆様のご理解とご協力につながることを祈念しています。

令和三年十一月

公益社団法人全国被害者支援ネットワーク理事長 椎橋 隆幸

目次

☆中学生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

- ・いのちの重さ

学校法人本郷学園本郷中学校

二年

柿沼 英樹

………

2

【文部科学大臣賞】

- ・当たり前が壊れる時

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校

三年

井上 実来

………

4

【警察庁長官賞】

- ・命の大切さ

学校法人本郷学園本郷中学校

二年

川崎 翔大

………

6

- ・事故の大きさ

名古屋市立田光中学校

二年

江崎 彩乃

………

8

- ・命の大切さ

田村市立船引中学校

三年

高橋 未来

………

10

☆高校生の部

【国務大臣・国家公安委員会委員長賞】

・ 私たちが目指す社会

福岡県立光陵高等学校

三年 中嶋 千菜

……

14

【文部科学大臣賞】

・ かけがえのないもの

静岡県立浜松江之島高等学校

二年 石垣 奏美

……

16

【警察庁長官賞】

・ 未来に繋ぐ命

富山県立高岡工芸高等学校

三年 高田 愛

……

18

・ 被害者を支える社会

岩手県立久慈東高等学校

二年 小泉 星三郎

……

20

・ 私たちの使命

和歌山県立向陽高等学校

二年 武田 理恵

……

22

【中学生の部】

いのちの重さ

(東京都)

学校法人本郷学園本郷中学校 二年

柿沼^{かきぬま} 英樹^{えいき}

僕の母の口ぐせは、「親より先に死ぬような親不孝だけはしないでほしい。」だ。まるで呪文のように小さい頃から言われ続けている。以前は呪文のように重く心に響いた言葉だったが、最近ではその呪文も効力がなくなってきた気がする。言葉が僕の目の前を素通りしている感じだ。

時々僕は自分の存在に意味があるのか、自分一人がいなくなっても何も変わらないし困らないのではないかと思う時がある。

そんなことを感じていた時に、学校で「命の大切さを学ぶ教室」があり、高田香さんの講演を聞いた。

交通事故で当時小学一年生だったお子さんを失ったが、その原因となった交通事故をなくそうとお子さんが残した朝顔の種を配布して交通安全を願う活動をされていた。その講演中にお子さんが事故に遭ったときの話をされている姿はとても辛そうだった。「子供を失ったときあまりの絶望感で何をどうしたらよいかわからなかった。」という言葉に自分は喉をしめつけられるような息苦しい気持ちになった。最後に「生きたくても生きることができなかった命を忘れてはいけない。」と言われたのが印象的で心の底に重い石を投げ込まれたようだった。

僕は講演が終わった後、高田さんの悲しそうな表情と母の言葉が思い浮かんだ。自分がいなくなった後の母の姿が重なってしまった。どれだけ母や家族が悲しむのか、絶対に母を悲しませたくない、親不孝はしないと改めて思い直した。

自分の存在に意味があるのか、という問いに対して今の自分は意味があると答えたい。自分の存在が誰かを幸せにしていることもわかった。

あの講演以降、死ということに少し気にするようになった。そこで気が付いたことがある。それはニュースや新聞、普段の会話などの生活の中で飛び交う会話だ。身近にいのちの会話がいろいろ多いのだ。

例えば「今日コロナの死者は五〇人。」「今日は昨日より二人死者が増加。」「インドでのコロナ死者は十三日時点で三三三・三万人、十四日時点で三三四・六万人、十五日時点で三三五・九万人。」というコロナ関連のニュースだ。毎日のコロナの死者数が数字の羅列にしか見えない。インドのコロナの死者数が細かい人数は切り捨てられ省略された人数はどこかに消えている。また「あのゲームで一〇キルした。お前は何キルしたのか。」「おれは一二キルした。」という会話は友人がゲームの進行具合を話している。仮想空間で殺す人数を競い合う。仮想空間ではあるがその命のやり取りが軽く感じられる。また「イスラエル・パレスチナ紛争で空爆死者百二十人超。」というニュースでは死者数が百二十人超の超に隠れている人数が何人いるのだろうか。

略されたり消えたりしているのが命だと思うと何ともいえないモヤモヤした気持ちになる。数値化された命の数はとても命が軽く感じられるのだ。

数字で考えてしまうと命の重さを感じられなくなってしまうのではないか。命に対して心が鈍くなってしまうのではないだろうか。

僕の心が鈍くなりそうなときは、高田さんの言葉と母の口癖を思い浮かべよう。命に真摯に向き合わないとその重さを感じられないことを肝に銘じようと思う。

当たり前前が壊れる時

(栃木県)

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 三年

井上 いのうえ

実来 みら

散乱するノートにランドセル、血の跡がついた車やぐしやぐしやになった黄色の通学帽の写真を母が見せてくれたことがありました。小学校入学前の私には刺激の強い写真でしたが、だからこそ、今も鮮明に呼び起こせる記憶なのだと思います。私が入学予定だった小学校のすぐそばで、登校する児童の列を車がはねた事故があったそうです。写真を見せながら、母が事故について話し、車の事故の危険性を説明してくれたはずですが、しかし、当時の私は「怖い」というありきたりな感想を持つだけで終わってしまったように思います。小学校の六年間、

通学路で危ない思いをしたことはなく、私の「怖い」という記憶も薄れていました。中学校に入学し、自転車通学が決まったときに、両親から車と自転車の事故の怖さについて改めて話がありました。両親ともに車を運転するため、車道を走る自転車について思うことや、ヒヤッとする体験なども細かく教えてもらいました。話は、小学校のそばで起きた事故についてでも触れ、「いつてらっしゃい」と朝玄関で見送った保護者が、事故の一報を聞いた時の恐怖や絶望を考えると、朝送り出す時も祈るような思いでいると言われました。

それまでは、何を大げさなことを思っていた私ですが、「命の大切さを学ぶ教室」で、交通事故で家族の命を奪われてしまった方のお話を聞いた今、違う気持ちを持っています。「いつてきます。」と「いつてらっしゃい。帰りは四時半くらいね。」といった家族との毎朝のやりとりは、何の前触れもなく壊れてしまう可能性があるということを強く認識したからです。

現代では、車や自転車を使った移動手段は、生活から切り離せないものとなつています。だからこそ、その危険性を理解し、最悪の状況に自分自身や大切な家族が遭遇することは絶対に避けたいと感じます。同時に、悲しい記憶を誰かに背負わせてしまうということも、絶対にあつてはならないものだと考えます。すべての人の当たり前の日々が、未来へとつながっていけるためにも、私たちは命のはかなさと重さ、そして身の回りに潜むリスクへの思慮を持ち続ける必要があると思います。そうして、自分の手でできることに取り組んでいく必要があると思います。かけがえのない自分と誰かの明日を守るために。

このような経験から、母の「いつてらっしゃい」に込められた想いの切実さを知った今、私が口にする「いつてきます。」や「ただいま」の言葉の意味も、以前とは少し違った想いを乗せています。「いつてくるよ。心配しないでね。気を付けて帰るからね。」や、「心配していたよね。帰りを待っていたよね。」

でも、たった今戻ったよ。もう安心してね。」というように。大げさに聞こえるかもしれないですが、私も家族もきつといつも心の中でお互いの無事を願いながら、これからもこれらの言葉を口にすると思います。

命の大切さ

(東京都)

学校法人本郷学園本郷中学校 二年

川崎^{かわさき}

翔大^{しょうた}

僕は今回、「命の大切さを学ぶ教室」の講演を受けました。講演を下さった方は、五年前に小学一年生の息子さんを交通事故で亡くされました。突然の事故で息子さんを亡くされ、言葉では言い表せない悲しみと悔しさにおそわれたと思います。それでもなお、立ち上がり、自分と同じ経験をする人が少しでもいなくなる様にと命の大切さを伝えるための活動をされている事が、とても凄い事であると思います。僕はテレビで、交通事故のニュースを何度も聞いていましたが、毎日毎日聞いているうちに、日常のよくある事故と感ずる様になっていて

「また事故か」「うわあ、かわいそうに」と他人事として軽く受け止める様になっていました。しかし、その事故の一つ一つの裏では、抑えきれない悲しみを背負う家族がおられたのだという事を思い知りました。

昨年のゴールデンウィークに、京都にいる僕の祖父が亡くなりました。誤嚥性肺炎で入院していましたが、コロナ感染防止の為、面会もできず入院一か月で亡くなりました。大好きだった祖父でしたが、具合が悪い事や入院する事を聞いていたので僕も家族も覚悟していました。言葉では言い表せないくらいの悲しみや悔しさにおそわれる事が無かったので、面会が出来ないままだった事が心残りで残念でしたが、穏やかな顔の祖父を見送る事ができ、人が死ぬという事をなんとなく理解した気がしました。命の大切さは、子供でもお年寄りでも変わりはありません。同じだと思います。でも、交通事故で突然亡くなる場合と病気で亡くなる場合などでは本人や周りの人、家族の悲しみや悔しさが大きく違うのだと思います。

ます。突然命を奪われる場合、とてつもなく大きな悲しみを抱える事になるのだと思います。そして、それは注意や心がけで防ぐ事ができるものであり、更に悲しみや悔しさを大きくさせる要因なのだと思います。亡くなるのではなく、命を奪われるという事は防げる事であり、あつてはならない事なのだと思います。

今の日本では、毎日どこかで交通事故が発生していると思います。毎日どこかで悲しい思いや悔しい思いをしている人がいるという事です。最近では、自転車の事故も増えてきています。車や自転車を運転する人が、命の大切さをもっともっと考えて運転すれば、交通事故は防ぐ事が出来ると思います。鉄の塊は人の大切な命を奪う凶器になるという事を常に意識して運転してほしいと思います。

僕は自転車に乗りません。自動車も運転できる年齢ではありません。でも、歩行者として命を守る事が大切であり、自分の命も人の命も守っていきたいと思います。自動車を運転する立場になった時、講

演で聞いた話を思い出し、事故で悲しみをうまないような運転をする事を誓います。

事故の大きさ

(愛知県)

名古屋市立田光中学校 二年

江崎^{えさき} 彩乃^{あやの}

「事故は、事故にあった本人だけではなく、その周りの人の人生もめちゃくちゃにする。」

この言葉は、いのちの尊さを教えていただく授業で、佐藤さんがおっしゃった言葉です。私は、この言葉が深く心に響きました。佐藤さんは、信号無視をした車によって三姉妹の次女を亡くされ、その後数年間は、記憶が曖昧になるほどの深い悲しみに包まれていたそうです。しかし、それは佐藤さんだけの話ではありませんでした。亡くなられた次女のお姉さんと妹さんだけではなく、事故当時隣にいた次女の友人の方もそうです。お姉さんは家族が暗く沈

んでいるのを見て、私だけはしつかりしないと、もそうですが、傷ついた自分を守るために、いつも通りの生活を送っているふりをしました。また、妹さんは、亡くなられた次女に、伝えられなかった感謝の言葉を紙に書いたり、必死に生きようと自分を励ましながら懸命に生活していました。そして、次女の友人の方。彼女は、自身も重傷でしたが、隣にいた次女は亡くなられてしまったため、「私だけが生き残ってごめんなさい。次女ではなく私が亡くなればよかった。」と佐藤さんにおっしゃったこともあったそうです。おっしゃった友人の方もそうですが、言われた佐藤さんも、苦しくなったそうです。お話を聞いただけでも、これだけの人が深く悲しみ、苦しみました。現在、長女、三女の方々は結婚をして、子どももおられるそうですが、だからといって悲しみが無くなった訳ではないと思いますし、このお話をされながら佐藤さんは泣いていました。このように、事故は事故にあった本人だけでなく、その周りの人の人生をも、めちゃくちゃにして

しまいます。しかも、佐藤さんの場合は、信号無視をした車が原因ですから、どれほどの怒り、苦しみ、後悔を抱いたのでしょうか。私には想像もできませんが、きっと、世界から何も無くなったかのような、私では耐えられない程の大きさだったに違いありません。それを飲みこみ、当時のことを話し、命の尊さを教えている佐藤さんは本当に凄いなと思います。だからこそ、佐藤さんたちのような人が出ないためにも、交通事故が無くなればいいと思います。そのためにも、まず、私自身が気をつけていきたいです。当たり前なのですが信号無視をしない、青信号でもしっかり左右を確認する、など基本のことを守り、加害者はもちろん、被害者にもならないようにしたいです。しかし、ほとんどの人がこれを守っていても、守っていない人が少しでもいると事故は起きてしまいます。だから、そういう人が減り、交通事故が少しでも無くなり、いつかは佐藤さんたちのように悲しむ人がいなくなって欲しいです。

命の大切さ

(福島県)

田村市立船引中学校 三年 高橋 未来

私は幼稚園最後の夏休みに、いとこのお兄ちゃんを交通事故で亡くしました。いとこは、家族旅行の帰りに高速道路で大型トラックに後ろから追突され、亡くなったのです。

いとこが事故に遭い、亡くなったと母から知らされたのは、真夜中でした。私の両親は、急いで荷物をまとめ、私を抱きかかえ慌てて車に乗り込みました。そして、事故が起きた静岡県に向かいました。いとこのお葬式の準備をしている時に私の母が、

「全然成長していないと思っていたのに、もうこんなに背が伸びていたんだね。」

と言っていたことを覚えています。

事故から八年が経った今でも、いとこのお墓参りにはたくさんの友達が来てくれています。みんなに愛されていたいとこは、今も私の心の中で生き続けていますが、小学四年生のままです。

いとこのお母さんは、つい最近まで自分が乗った車の後ろをトラックが走っているだけで、

「怖い、怖い。」

と言ってパニックになっていました。私は少し考えすぎなのではないかと思っていました。しかし、今回の講演を聞いて、このようなことが二次被害にあたるもので、事件や事故で被害に遭った人は誰もが経験することだと知り、申し訳ない気持ちになりました。

私は帰宅してから、母と交通犯罪について話し合いました。私のいとこが亡くなった事故は「禁錮二十日」だったそうです。大好きないとこが亡くなったのに、あまりにも短すぎると思いました。しかし、母によると、交通犯罪は、最高でも五年くら

いだそうです。私は大切な息子を失って、さらに二次被害でも苦しんで辛い思いをしていたとこのお母さんのことを考えると、交通犯罪の刑の軽さに何とも言えない気持ちになりました。

最近では、あおり運転による事故も増加しています。現在の法律には、ドライブレコーダーの設置義務がありません。自分はおおっているつもりがなくとも、相手からするとあおられていると錯覚することもあると思います。少しでも交通事故を減らすために、ドライブレコーダーの設置義務が必要だと思えます。また、双方の意見が食い違い、えん罪などが起きないようにするためにも良いのではないかと、母との話し合いで感じました。

私のいとこのお母さんや家族は、大切な人を亡くして大変苦しみ、辛い日々を送っていました。これからは、そのような人を一人でも減らさなければなりません。一人一人が交通ルールを守り、運転手は常に優しい運転をするべきです。学校や地域での呼びかけはもちろん、法律を変えるなどして、社会全

体で交通事故を減らすよう取り組む必要があると思います。そして、一人一人の大切な命をみんなを守っていききたいと思いました。

【高校生の部】

私たちが目指す社会

(福岡県)

福岡県立光陵高等学校 三年 中嶋 千菜

現在、日本でも多くの交通事故被害者遺族の方々が辛い過去を抱えながら生活を送っている。私自身、その一人である。

四年前の十月のことだった。当時中学二年生だった私は、いつものように学校から帰って自宅でくつろいでいると、思いがけず母から電話がかかってきた。

「今、病院にいるから少し遅くなる。」

母の声は少し震えていた。私は何が起こったのか言いようのない不安と心配を抱えながら母の帰宅を待った。玄関を開く音がしたので急いで駆け付けると母は涙を流していた。

「おばあちゃんが交通事故で亡くなった。」

突然のことに私は頭が真っ白になった。そして、も

う祖母には会えないのだと理解が追いつき始めた時、心臓を手掴みで締め付けられているような感覚に陥り、涙が止まらなかつた。祖母に会うたび、「ちな（私）が結婚するまで長生きするよ。」と言ってくれていたのが今でも昨日のことにように蘇り、忘れられない。私は一瞬にして大切な人の命を奪われることの悲しみと苦しさを思い知った。それと同時にこんなにとまたやすく人の尊い命を奪うことができる車は凶器だと思つた。そして、心の中で「許せない。」という気持ちがあるに違いないが、それでも私の大切な祖母の命を奪つていった凶器だという認識が今でも拭いきれない。

あの日から、交通死亡事故の報道を見ると、他人事とは思えず、遺族の方々は深い心の傷を一生抱えたまま生きていかななくてはならないのだと考えるようになった。突然大切な人を奪われる出来事は、悲惨としか言いようがない。最後のお別れの言葉も言えず、今までの感謝の言葉も伝えられない。こんな辛い現実があつていいのだろうか。祖母の死から月日が経つにつれて私には思うことが一つあつた。それは、毎日のように交通事故が報道され、減る気配は

一向にないということ。あの日から、命が簡単に奪われてしまうという現状は何一つ変わっていないのだ。

つい先日、福岡西陵高校で行われた、山本美也子さんによる「命の大切さを学ぶ教室」の動画を視聴し、飲酒運転の怖さを知った。事故当時の状況やその時の山本さんの気持ちがひしひしと伝わってきて、聴いている私も憤りを覚えたり、悲しくなったりした。山本さんの言葉で強く印象に残ったのは、「自分は大丈夫」、「少ししか飲んでないから大丈夫」、そんな身勝手な気持ちで簡単に人の命を奪うことに繋がるというものだ。飲酒運転を起こした人も、飲酒運転がいまだにゼロにならない社会も、私は許せないと思った。交通事故は誰も幸せにしない。誰もが苦しむ。しかし、私だけがそう思っても社会は何も変わらない。

では、一体私たちはどうすれば良いのだろうか。それは、より一層安全運転を心掛け、命の大切さを理解する機会を持つてもらふ事以外にないと私は思っている。山本さんのような活動が全国民に届き、交通事故故によって大切な人の命が奪われることの理不尽さを学習し、私たちが今、何をしなければならぬのかを考える。山本さんは、その悲惨な体験を通

して得た助言を私たちに残してくれている。

「ありがとう、ごめんなさいをその日のうちに相手の顔をしっかりと見て伝える。」

交通事故は、いつ、どんな形で起こるかなんて誰にも分からない。自分か、それとも自分の大切な人が事故に遭うのか。あるいは、自分のせいで誰かを死なせてしまうのか。だから、山本さんがおっしゃったように感謝の気持ちと謝る気持ちをその日のうちに伝えておこうと思う。私と同じ経験をもう誰にもさせたくない。あの日の苦しさを誰にも味わわせたくない。命を互いに尊重し合える日々を送ることこそ、私たちが社会を変える一歩なのかもしれない。

現在、日本における一年間の交通事故死者数は約三千人である。私はその数を少しでも減らすことができるよう、今自分にできることを精一杯やろうと思う。そして、この経験から私は警察官になるという覚悟を決めた。飲酒運転や交通事故によって大切な人の命を奪う一部の人たちの身勝手な行動を自分の手で防ぎ、日本の安全・安心を守りたい。私たちが目指すのは、交通事故がゼロになる社会だ。私は近い将来、それが現実になると信じている。いや、確信している。

かけがえのないもの

(静岡県)

静岡県立浜松江之島高等学校 二年

石垣^{いしがき} 奏美^{かなみ}

「どうか生きてください。」

暖かな陽が差し込む午後三時、震えながらも力強い声が静寂に包まれた学校中に響いた。

この言葉は、命の大切さを学ぶ教室で講話をしてくださった則竹崇智さんの一言だ。彼は交通事故によって息子の敬太さんを失った。ながら運転をしていたトラックの運転手の不注意で起きた事故だった。たった九歳にして天使になった敬太さんは、どれだけ痛かったのだろう。生きたいと願ったのだろう。そして親族はどれだけ苦しかったのだろう。生きて欲しいと願ったのだろう。それら全てを講師の

則竹崇智さんが教えてくださった。

平成二十八年十月二十六日、集団下校の途中、信号のない横断歩道で敬太さんはトラックに撥ねられた。崇智さんは仕事で忙しかった。敬太さんが事故に遭ったことを知り、同居の母へ電話した。携帯の向こうでは救急車の音がした。則竹さん一家が揃うと、

「救急車の中で心臓が止まったみたい。」

と母が言った。崇智さんができることは、

「先生がなんとかしてくれる、大丈夫。」

と言うだけだった。一時間後、処置室で目の当たりにしたのは、ドクターが馬乗りになって心臓マッサージをしている光景。それを見て崇智さんの奥さんは膝から崩れ落ちた。長男はずっと黙ったまま奥歯を噛みしめ座っていた。敬太さんの左手を奥さん、右手を崇智さん、両足を敬太さんの祖父母が触ると、まだ温かく心臓は動き血圧もあった。

「敬くん、よく頑張ったね。」

「痛かったな。」

「大丈夫だからな。」

家族の想いも届かないまま、事故から約二時間後、敬太さんは彼が生まれた場所で天国へ旅立った。

この話を聞いた後、敬太さんや親族の方々の気持ちを考えると私の目から涙が止まらなかつた。そして、かけがえのない息子を失い心に深い傷を負ったはずなのに経験したことを話してくださった崇智さんが、私たちに何を伝えたかつたのかを考えると、流れた涙を止めるのに時間がかかつた。

自転車を運転している私たちは加害者にもなりうる。携帯を常に手に持っていないと落ち着かなかつたり、通知がきて少しならいいかとメッセージを返したりしている人をたくさん見る。私も登下校中携帯が手放せず、すぐに触れるようポケットに入れていた。しかし、崇智さんの講話を受け、少しぐらいと、携帯に気を取られている内に自分の身にも誰かの身にも危険が迫っているという事に気づいた。私は怖くなり、携帯は常にカバンにしまうようにした。私の友達も登下校中は一切携帯を触らなくなつた。さらに、浜松江之島の生徒全体としても危険な運転をする人は

減つたように感じる。崇智さんの想いが多くの人に伝わつた証拠だ。私は自分の事のように嬉しく思つた。

私たちは大人に頼り生活している未成年だが、社会の一員でもある。今回の講話のながら運転だけでなく、いじめ、体罰、虐待、育児放棄、殺人、災害など、目を逸らしてはいけない出来事がたくさんある。どれも簡単に命を奪つてしまう。いつ、何が起るか分からない。だからこそ当たり前を過ごしている日々を大切にしなければならぬと思う。普段から遊んでいる友達や、「おはよう」「いつてきます」「ただいま」「おやすみ」と言い合う家族、楽しい時も苦しい時も側にいてくれる人々に感謝をして生きていきたい。かけがえのないものは命だけでなく彼らの存在であるということを教えてください。くださった崇智さんにも、感謝の気持ちでいっぱいだ。

今回のような講話は現代の子供たちにとって得るものは多く必要不可欠な経験だと思う。講話を受けることで様々なことを感じ、感謝の気持ちを忘れぬ人が増えてほしい。かけがえのないものを失わぬように。奪つてしまわぬように。

未来に繋ぐ命

(富山県)

富山県立高岡工業高等学校 三年

高田^{たかた} 愛^{あい}

「ひとりの命が奪われた」「ひとつの命が奪われた」といった表現をよく目にするが、違和感を覚えなだろうか。私はずっとこの表現に引っ掛かっていた。なぜなら、命を落とした人だけでなく、未来に繋がっていくはずだった命も同時に奪われたと感じるからだ。

私はこの作文を書くにあたって被害者・支援者の方の講演録を読んだ。それぞれ事件の内容は違えど、共通していたことは事件から長い月日が経った今でも深い悲しみの中にいるということだ。事件を知らない私でも、講演録を読んでいるだけで事件が

映像化され、頭の中を巡り、辛くなった。

その中でも、飲酒・ひき逃げ事件によってご子息を亡くされた高石洋子さんの講演録は、読んでいて胸が張り裂けそうになった。高石さんのご子息は早朝の新聞配達のアルバイトに向かう途中、飲酒運転をしていた男性によってひき逃げをされ、命を奪われた。

高石さんのご子息は、当時の私と同じ高校二年生という若さで命を落とした。家族はもちろん、友人や先生といった多くの人々が悲しみにくれた。もしも、飲酒運転をしていた人にひき逃げされたという形で友人を失うことを想像したら、悲しさと悔しさで胸がいっぱいになった。

高石さんは家族やご子息の友人に支えられ、助けられたそうだ。「励ましの言葉、共に悲しみながらも前を向こうとしている人たちの姿を見ていると自分も頑張らなければと思えた」とおっしゃっていた。その一方、傷付くこともあったそうだ。その原因は、主に言葉によるものであった。言葉は様々な

形に変化して相手に伝わってしまうことがある。悪意のない発言でも、形を変え、針となって心を刺してしまうことがある。言葉は一番簡単に伝えられる表現だからこそ、慎重に選ぶべきだと思った。

私は、昨年の命の大切さを学ぶ教室に参加して抱いた思いをこの講演録を読んで再び抱くことになった。それは、加害者はずるいということである。この事件の加害者は飲酒運転をしていたが十時間以上の逃走によってアルコールが検知されず罪が軽くなった。加害者は逃げて得をしようことがあるのだ。だが、被害者は命を落としてしまう。加害者がすぐに救急車を呼んでいれば、助けられたかもしれない命。それが加害者の自分勝手な保身のために消えてしまうのはおかしい。

もし、高石さんのご子息の命が助かっていたら、今どのような生活を送っていたらどうか。結婚をして家庭をもち、子宝に恵まれていたかもしれない。未来ある命がこのような形で奪われたことはとても悲しいことである。

私たちの命は自分ひとりだけのものではないのだ。将来、結婚して子供が誕生するとする。そして、今度は子供が結婚して、孫が誕生するとする。このように考えると命はとても尊いものではないだろうか。私たちの命は未来に繋がっていくのだ。

また、多くの人に「自分の代わりは存在しない」と考えてほしいと思った。自分自身が誰かにとってかけがえない存在だと気づいてほしい。

目に見えない命は突然、死という形で目に見える状態になる。死という形になってから命に気づいても遅いのだ。だから私は命の尊さをひとりでも多くの人に早く気づいてほしいと思っている。

被害者を支える社会

(岩手県)

岩手県立久慈東高等学校 二年

小泉 こいずみ

星三郎 せいさぶろう

現在、日本には被害者遺族の方が多くいる。そして、いつ、誰がその立場になるかは分からない。

私は以前、交通事故でまだ当時小学生だった息子さんを亡くした方の話を聞いたことがある。息子さんは横断歩道を渡っている途中に、ながら運転で前を見ていなかったトラックに、後ろにいた弟の目の前で轢かれた。その後、息子さんは急いで病院に搬送されるも内臓が破裂するなどしており、治療の甲斐なく亡くなった。事故の後、トラックの運転手から直接会って謝罪したいという手紙を貰ったが、その方は受け入れなかった。誠意を文から感じられな

かったそうだと。そして何より、その方が言っていた「亡くなった息子の弟が可哀想だ。」という言葉が忘れられない。実際そうだろう。目の前で自分の兄がトラックに轢かれるところを目撃したのだから。その方は現在、教師の仕事をしつつも被害者遺族として講演を行っている。少しでも、ながら運転の危険性と家族の大切さを広めるためにやっているそうだと。

私はこの話を聞いた時、大きなショックを受け、また、胸が締め付けられるような気持ちになった。それと共に、このような事故は他人事ではない、いつ自分の身、周囲の人の身に降りかかってもおかしくないと考えた。その後、私はながら運転について調べてみた。ながら運転の発生数は近年大幅に増加しており、十数年前と比べ二倍以上になっている。また、自転車のながら運転による死亡事故も発生しており、私達も被害者だけでなく加害者側になる可能性があることも分かった。そして、事件事故後の被害者遺族についても調べてみた。事件事故の発生後、マスコミなどの報道関係者はすぐにそのことを

知り取材に訪れるそうだが、その方々の配慮の足りない発言や心無い発言に傷つけられたり、友人や隣人から今の自分の心情とはまったく違う言葉をかけられ違和感を覚えるなど、事故による直接的な被害以外にも様々な苦勞をしているということが分かった。もし自分の家族が事件事故に遭い、命の危機にある中で、マスクミや周囲の方々はこの様な対応をされた時の精神的・身体的疲労やショックを考えると、今の平穩で何気ない日常がまったく当たり前ではない、かけがえのない時間であるということを感じた。

この様な思いをする被害者を減らすためには、そもそも事件事故を減らすことが一番だがそれには限界があり、完全にそれらを無くすことは出来ない。自らが加害者・被害者両方にならない様に注意するのは当然として、被害者の心情を考え、時に寄り添い、時に励ますことが重要だと思った。また、検察庁による被害者ホットラインや警察による犯罪被害者支援、県・地域の被害者支援センターなどもあ

り、岩手の被害者支援センターには寄付や支援のページがあり、そこから被害者を支援するという方法もあることが調べて分かった。

事故に繋がりそうなことはしない、事件に繋がる様なことは止め、止めさせる。被害者が生まれたなら心情を考え支援する。そして何より、自分も相手もかけがえのない時を過ごしている大切な命であるということを考えるようにすれば、少なくとも今よりは被害者を生まない社会になるのではないだろうか。

私たちの使命

(和歌山県)

和歌山県立向陽高等学校 二年

武田^{たけだ}

理恵^{りえ}

「黒いビニール袋の中には、切り刻まれた息子の制服が入っていたのです。」私はこの言葉を聞いた瞬間、息ができないほど苦しくなった。なぜか。それまで私は語り部からの話を無意識のうちに現実離れした話として捉えてしまっていたことへの後悔と罪悪感が私を襲ったからである。これまで生きてきて命の大切さを学んでこなかった、とかいうことではなく、逆に昔から「命は大切にしなければならぬ。」と強く言われてきた記憶がある。そうであるにも関わらず、なぜ私は今回の体験談を聞いて今までに無いショックを受けたのだろうか。

思いかえすと、私はこれまで命に関わるような出来事を経験していない。ただ淡々と年を重ね、ドラマのような奇跡体験をしたことももちろん無い。いつしかそんな「何も起こらない世界」が自分の中で「当たり前前にある世界」へと変換されてしまった。だが、語り部の話を聞いて考えが百八十度変わった。何も起こらないことこそが一番の大切な幸福であり、一番気づきにくい幸福なのである。私は嬉しくなった。十六年間生きてきて、初めて気づくことができた。ここでまた新たに疑問が生まれる。私だけ気づいたところで、何が変わるのだろうか。そんなエガティブの塊のような思考におちいりかけていたとき、つい数分前に語り部が言っていたことを思い出した。「息子が持った使命は、幸せの種をまくこと。」「私の使命は何なんだろうって考えてみたのです。」「これだ。私は心の中でそう呟いた。語り部の使命が私たち生徒に命の大切さを伝えることなのだとしたら、私、いや、私たちの持つ使命なんてもうすでに分かっているじゃないか。語り部の数十

年分の思いを、ほんのわずかな力であったとしても、必死に私たちへぶつけてくれた言葉のかけらを、広げていくことこそが私の使命なのだ。そう考えると、ネガティブな思考はいつのまにか消えてしまっていた。私のこの気づきを言葉にし、声に出すことでもしかしたら他の誰かが命の大切さを学ぶことの助けになるかもしれない。今書いているこの作文だって、誰かの心を動かすことができるかもしれない。

このような、「誰かの思いを自ら感じ、それを伝える」という一見単純にも思える行為は、実は本当に難しいのではないか。それでも、私にこのことを気づかせてくれたのは何者でもなく、この講演であるのだ。つまり、考えるきっかけを持つことが最も重要なのである。実際、この講演を聞く前と聞いた後で私自身の価値観、物事の考え方感じ方は見違える程変わったであろう。この感動を他人に与えられるような人になりたい、今日出会った語り部のように。そう思った。

前文に記した通り、私はまだ直接命が失われるのを経験したことはない。だが、その時はいつか必ず訪れるものだ。しかし、「その時」が訪れる原因が犯罪であることは許されるものではない。加害者にも被害者にもなってしまう可能性がある私たちには、本当なら生きていたはずの尊い命を胸に、現実から目を逸らさず命の重さ、命の大切さについて考えるべきなのだ。それこそが、私たちの今で重要な「使命」なのだ。

